

本稿は、労働と祭祀という契機に注目してヘーゲルの『精神現象学』におけるギリシア世界論を中心として分析し、それによって、ヘーゲル哲学の生成の一断面を提示するものである。

一方で、フランクフルト期の所有論から供犠論への展開、および、この展開とイエーナ期の労働論との間には、本稿でも指摘するように、内的な連関が存在する。この連関の把握は、『現象学』におけるギリシア世界論を理解する上で重要な意味を持っている。また他方で、『現象学』の労働論、アンティゴネ論、祭祀論は、自己意識、精神、宗教という異なる議論の水準から同じギリシア世界を扱うものでありながら、これらに共通する構造が存在している。この構造がまさにフランクフルト期に醸成されていたのである。

しかし、フランクフルト期とイエーナ期の連続面に関して、所有論、供犠論から労働論への展開過程を分析する研究は、これまでなされてこなかった。また、労働論、アンティゴネ論、祭祀論もそれぞれが個別に論じられてきたため、ヘーゲルのギリシア世界論に共通する構造を見出そうとする研究も存在しなかったのである。本稿では、フランクフルト期からイエーナ期の論の展開過程において、人間の行為の定式化の観点から内的連続性が生成されることを指摘し、この定式化された構造が『現象学』におけるギリシア世界論に引き継がれていることを明らかにした。

本稿の第一章では、イエーナ期以前にヘーゲルが「所有の運命」という語で思索していた事柄と「1800年体系断片」における供犠論との内的連関を考察し、その供犠論の構造が『人倫の体系』の労働論において展開されるのを明らかにした。共同体における個別性の処遇の問題をイエスの事跡をたよりに考え始めたヘーゲルは、法哲学—経済学の研究を経て、個別性を所有という概念で言い換えていく。この所有の問題をヘーゲルは、「1800年体系断片」とよばれる草稿のうちで、所有の部分的無化という構造をもつ供犠論によって根本的に乗り越えていく。この構造は、労働論としては『人倫の体系』に引き継がれる。ここで導入されている占有と所有の区別は、「体系断片」の供犠論が労働論へと引き継がれる重要な契機となっていた。その後、この構造は『現象学』においてギリシア世界の行為を論じる際に重要な機能を果たす。これらをふまえて、この章では、第五章であらためて別の視角から考察される『現象学』のアンティゴネ論を最後に扱い、埋葬行為にヘーゲルが供犠—労働論的構造を当てはめ、占有取得の行為として理解していることを明らかにした。これにより、『現象学』のギリシア論の構造をその生成の相のうちに捉えることが可能になった。

第二章では、前章で愛という感情を通じてヘーゲルが後の哲学的展開に連結する問題群とその対処に際会したことをうけ、ヘーゲル哲学における感情概念の位置を見定めた。

啓蒙の時代に感情概念をもとに哲学を構築する動きがあり、ヘーゲルもまた同調していた。ここにギリシアの快活さへの憧憬が重ねられて、ヘーゲルはその哲学的経歴を開始したが、やがて「反省形式」へと変貌せざるをえなかった、と述べるに至る。

しかしその変貌は、ヘーゲルが批判した思惟、すなわち外的な物の集積のみが己の対象となるのを許すような啓蒙的思惟への転身を意味しなかったのだとしたら、感情概念にも位置づけがなされているはずである。

こうした観点から『現象学』においても、人間的精神の生成のひとつの重要な契機として感情が扱われていることを明らかにした。その際、晩年の「ヒンリヒス宗教哲学への序文」という論文を手がかりとして、『現象学』序論および緒論などを分析するなかで、ヘーゲルによって感情と獣というモチーフが組み合わされていることを確認した。

この組み合わせと行為とがさらに結びつき、『現象学』におけるギリシア世界論の論述の特性を形成している。すなわちそれらの契機は、第三章以降の労働、祭祀、埋葬を読み解くヘーゲルにとって重要な役割を持っていることを明らかにした。

第三章では、第一章の供犠—労働論の構造と第二章の感情の分析をもとに、『現象学』における労働論の構造を検討した。「体系断片」とその展開や、感情という契機を考慮に入れることで、『現象学』の労働論の特性を明らかにした。そこでは、ギリシアを背景として労働論が展開され、感情と獣という契機の組み合わせの他に、生の溶解の威力と持続という概念とともに論じられていることや、その思想的背景を確認した。さらには自己自身の所有の問題としても論じられていることが明らかになった。

第四章では、『現象学』の祭祀論をギリシアのツェレスとバッカスの密儀（ディオニュソスの密儀）を中心に検討した。供犠論から労働論へとヘーゲルが哲学的に展開していったその内的連関にいての考察も加えた。両者をつなぐのは、あらゆるものを溶解させる威力であり、労働においても、神的威力と人間が交わることを逆に示すものともなっている。

第五章では、本稿のこれまでの道具立てでオイディプスとアンティゴネの物語をヘーゲルが共同体論として読む様を、検討した。第六章では、前章のアンティゴネ論の分析をふまえて、『コロノス』のオイディプスがヘーゲル哲学において占める位置を見定めた。

本稿で、ヘーゲルは意識が自らの威力に際会する時節をギリシア世界のうちに見出し、ギリシアの人間が労働と祭祀という行為を通じて己の感情を耐え抜き歩み抜く姿に託して、自らの哲学的遍歴を『現象学』のうちにひとまず記録したことを明らかにしたのである。

## 論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	鈴木 亮三
論文審査担当者	(主査) 教授 直江 清隆 教授 戸島 貴代志 准教授 荻原 理 准教授 原 塑 東北大学総長特命教授 座小田 豊
論 文 名	『精神現象学』におけるギリシア世界論——労働と祭祀を中心として
<p>本論文は、ヘーゲルの『精神現象学』(以下『現象学』)に関し、労働と祭祀という契機に注目して分析し、ヘーゲル哲学の生成の一面を提示しようとした力作である。論者は、『現象学』に先立つ初期ヘーゲルのフランクフルト期の所有論から供犠論への展開とイエーナ期の労働論との内的連関の把握が、『現象学』におけるギリシア世界論の理解にとって重要な意味もつことを主張する。その上で、『現象学』の労働論、アンティゴネ論、祭祀論が、自己意識、精神、宗教というそれぞれの議論水準で、『現象学』以前の把握と共通する構造を有していることを指摘する。</p> <p>第1章では、イエーナ期以前にヘーゲルが「所有の運命」という語で思索していた事柄と「1800年体系断片」における供犠論との内的連関を考察し、その供犠論の構造が『人倫の体系』(1802年冬～1803年春)の労働論において継承され展開されていることを明らかにする。</p> <p>第2章では、ヘーゲル哲学の生成における感情の役割について論じられる。感情を哲学の軸に据えようとした動きに同調して哲学的経歴を開始したヘーゲルは「反省形式」による哲学へと転ずるが、その際、『現象学』においても人間的精神の生成のひとつの重要な契機として感情が扱われていることを論者は明らかにする。第3章では、『現象学』における労働論の構造が検討され、その労働論がギリシアを背景として展開されていることが主張される。論者はそこで、ヘーゲルの労働論における形成の原義が、生が己自身の生みだしたものを溶解させて自己保持をする循環にあることを指摘し、ヘーゲルの労働論が供犠論から生まれ、感情という契機を巻き込みながら、労働や祭祀といったギリシア的な行為概念として完成するのだと主張する。第4章では、『現象学』の祭祀論がギリシアのツェレスとバッカスの密儀を中心に検討され、神的威力と人間との交わりを軸に供犠論から労働論へとヘーゲルが展開していった内的連関に関して考察がなされる。</p> <p>第5章では、ヘーゲルが共同体論としてオイディプスとアンティゴネの物語を理解していることに検討が加えられる。アンティゴネが兄の埋葬によって守った家族の原理は共同体によって罰せられ、共同体は逆にその存立根拠である家族の原理を崩して己自身を失ってしまうが、その有様に、ヘーゲルが性によらない婚姻—生殖を見て取っていたと論者は主張する。この分析を踏まえて、第6章においては、ヘーゲル哲学において『コロノス』のオイディプスが占める位置が見定められ、『現象学』以降の宗教哲学・美学講義において、『コロノス』は『アンティゴネ』より重要な役割が与えられ、オイディプスとイエスが重ね合わされていくことの意義が解き明かされる。</p> <p>以上の論述は、詳細な文献考証をもとに、ギリシア世界とキリスト教世界とを重ねて両者の同質性と差異性を読み解く観点がヘーゲルのなかでどのように醸成されていったかを解き明かすものであり、この成果は斯学の発展に寄与するところ大である。よって本論文の提出者は博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	